

宗教文化をどのように伝えるか？

2006年12月2日に大正大学において、当財団主催の公開シンポジウムが開催され、約120名の参加者があった。

今回のシンポジウムは、宗教文化を人々に伝達する際に、どのような問題群が存在するのかを多角的に検討することを目的としている。今日の社会において、宗教の社会的意義は決して小さくなっておらず、むしろ様々な領域で宗教の重要性があらためて見直されている。ところが、宗教的知識・情報の伝達に目を向けたときに、それらが必ずしも適切な形で十分に供給されていないというのが現状であり、宗教文化の伝達をいかにこなうのかについての考察は急務だと思われる。そこで、このシンポジウムでは、教育、医療、メディア、観光という、宗教文化に深く関わる分野で研究ないし実践に携わっておられる専門家に集まっていただき、宗教文化の伝達をめぐる諸問題について発表をお願いした。

シンポジウムの概要は以下のとおりである。まず、司会の山中弘（筑波大学教授）が生命の人工的操作をめぐる倫理問題、10代の子供たちの自殺や殺人など、命や死をあらためて問い直さなければならぬ昨今の社会状況に比して、日本社会において宗教文化をどう伝えるのかという問題意識が希薄であるという現状を述べながら趣旨説明を行い、その後パネリストの発題となった。



内田美和子氏（日本女子大学附属高校教諭）は、教育現場における「宗教」

の状況について、実際に高校で教鞭をとっている際の体験から報告を行った。内田氏によれば、世界史教育などにおいて宗教は紛争や

暴力と関連して教えられるためにマイナスイメージを与えがちであるが、生きる指針として、あるいは身近な問題とリンクさせて宗教を教えると効果的であるという。又、同氏の勤務校でアフガニスタンから短期留学生を受け入れた際に、多くの日本人生徒が真摯なイスラム教信仰（祈り、戒律、証し）に触れることで、より理解が深まったことを紹介した。

大下大圓氏（高野山大学客員教授）は、映像資料を使いながら、自らが実践するスピリチュア



ルケアの現状について報告を行った。同氏は、医療現場でスピリチュアルケアの需要が高まっていると指摘するとともに、スピリチュアルケアの現場が医療現場に限らないと述べた。さらに、氏は自坊で妊婦に瞑想を勧めていることを紹介し、瞑想の重要性について論じた。

石井研士氏（國學院大學教授）は、テレビを流れる宗教情報に対して強い懸念を表明した。同氏によれば、今日日本の放送メディアで扱われている宗教情報（占い、超能力など）には極端な偏りがあり、視聴者に悪影響を与えるおそれがあるという。しかし、その種の問題のある番組にクレームをつける視聴者はほとんどおらず（石井氏ご自身はそうした番組を放映する放送局に個人的にクレームをつけているものの黙殺されるという）、誤った情報が一方的に垂れ流しされているのが現状だという。この現状を踏まえて、氏はメディアが流す宗教情報を監視する第三者機関の設置を提案した。



松井圭介氏（筑波大学講師）は、長崎の教会群を例に、宗教文化が世界遺産に指定されること

の意味について考察を行った。同氏は、「世界遺産ブーム」の中、宗教文化が観光資源化・商品化されてしまう一方、宗教文化が世界遺産になることによってその信徒が誇りやアイデンティティを確立するという利点があることを指摘し、世界遺産という制度を正負両面から論じた。

さらに、これらの発題に対して、二人のコメントーターが発言した。



コメントーターの西出勇志氏（共同通信記者）は、メディア内部の状況を紹介します、ニュース

的価値という面で紛争や暴力と宗教との関わりが注目されやすく、結果として宗教に対する否定的なイメージが強くなることや、メディア関係者の間にある新宗教や有名な占い師に対する無関心等について述べた。

コメントーターの井上順孝氏（國學院大學教授）は、各分野で宗教文化を人々に伝えなければならないことが認識されているながら、教える教師が非常に少ない（内田氏や大下氏のような人は稀）等の理由でそれがうまくいっていないことを指摘した。その上で、各分野を結びつけるための宗教文化教育センター設置の必要性を訴えた。

その後、フロアを交えて質疑応答が行われた。議論は多岐にわたり、多くの質問が投げかけられたが、特に宗教文化と信仰との関連が問題になった。例えば、フロアからの「宗教を教えるには祈りの体験が重要ではないか」という質問に対し、内田氏から「重要さ

は理解できるが、学校教育では困難である」、大下氏から「工夫すれば祈りを教えることも可能である」という回答があった。それを受けて、井上氏は、「祈りを教えることは、ベテランなら出来るが一般の先生は出来ない。現実的に実行可能か否かという問題を視野に入れながら議論していかなければならない」と指摘した。

最後に、司会の山中が、宗教文化の伝達の問題は需要と供給のバランスの悪さであり、今回はその問題を考える第一歩となった、これからそのアンバランスを解消していくにはどのようにすればよいかを課題となると総括してシンポジウムを締めくくった。

今回のシンポジウムでは、宗教研究者だけでなく、高校教育の現場に立つ教員や医療における精神的ケアに自ら携わってきた宗教者、宗教報道に詳しい通信社の記者等、幅広い人材がそれぞれの立場から活発な議論を行った。この議論を通じて、宗教文化の伝達に際しての様々な問題点が明らかになるとともに、有効で適切な伝達とは如何なるものかについて、重要な示唆を得ることが出来た。報告者、コメントーターの方々及びシンポジウムに参加して下さった方たちに感謝の意を表したい。（山中弘）

